50周年にあたって

広島文化学園大学　山崎　　晃

附属幼年教育研究施設開設50周年おめでとうございます。元施設長であった者として心からお祝い申し上げます。今回このような機会をいただき，感謝いたします。

さて，全国で広島大学の附属幼年教育研究施設（幼研）だけが幼年期に関わる幼児教育部門・幼児心理学部門としてその存在は傑出していると思います。これまでに多くの研究者を輩出する学問の基盤を形成する役割を果たしてきました。北海道から沖縄まで全国の大学・短期大学で幼研の出身者は活躍しています。しかしながら，昨今，この半世紀に渡る長い歴史のある「幼年教育研究施設」名だけ残り，実態がなくなるのではないかという噂を耳にします。もしこの噂が本当であれば，誠に憂うべき，危機的状況にあるのではないかと危惧しています。

すでに幼研の礎を築いてこられた先生方がおっしゃっていると思いますが，広島大学附属幼稚園はご存じの通り，幼研の研究の為の実験園として設置されています。今でこそ，幼研は教育学研究科の研究棟に入っていますが，広島市千田町に幼研があった時代には，幼研が２階，附属幼稚園が同じ建物の１階にありました。従って，いつでも幼児の活動や保育を観察したり，一緒に遊んだりすることができました。現在は，施設と附属幼稚園は別々の場所にあり，離れていますが，その物理的距離が心理的距離に比例していないと信じたいものです。

幼研施設長と附属幼稚園長を勤めた経験から考えることがあります。施設の役割の一つには，基礎研究を幼児教育・保育にどう還元するかを考えおくべきですが，幼稚園との関係は適度な距離で，適度な交流が必要だと思います。附属学校園が学部附属・研究科附属ではなく，大学附属になってからは，特にその関係は重視されなければなりません。また，附属幼稚園の研究の充実には幼研のスタッフの協力が不可欠です。附属幼稚園教諭のうち担任は３名です。附属幼稚園として毎年研究大会を開催し，保育を公開し，研究紀要を発行することが求められていることからすれば，幼児の教育や幼児の発達を理解している幼研のスタッフとの共同研究や協働が求められていることでは言うまでもないでしょう。そうした協働・協力が幼稚園と幼研との望ましい関係につながるものだと思います。もう一つの役割は，学際的研究に触れる機会を在学する大学院生に，修了生に，そして現場の保育者に提供し，幼児教育に関する研究・教育に先導的役割を果たすことだと思います。幼研は幼児教育学と幼児心理学を中心に幼年期に係る様々な研究に触れることができるところにその良さがあります。教育学と心理学を基礎としながら相互に影響を与えて研究を進めることができる環境が備わっています。先に述べましたが，修了生は全国各地で活躍しています。今こそそのネットワークを生かし，これからの幼年期の研究をさらに進めていくように期待します。

最後に，これからの幼研に言葉を贈ろうと思います。Ｒ．キーガンとＬ．レイヒーは『なぜ人と組織は変われないのか』という本の中で，「環境順応型知性」，「自己主導型知性」，「自己変容型知性」について解説し，変わるために必要な３つの要素，「心の底から，心の底を揺さぶる（本能を）」，「やる気を起こす，思考と感情の両方に働きかける」，「思考と行動を同時に変える」を提案しています。更なる発展を祈っています。